

## 縁起と浄土

——釈尊の覚り（智慧）から誓願（慈悲）へ——

小川 一 乗

### はじめに

ただ今ご紹介頂きました小川でございます。これからしばらくの間、お付き合い願いたいと思います。光華女子大学さんのこの宗教講座には、蜂屋 慶学長の時にお招き頂きましたして、「梵天勧請」（『真実心』、第七集所収）という講題で、話をしたことを憶えています。かなり昔の一九八四年のことです。それから七年前には光華講座で「仏教の原点とは何か——釈尊の「真宗」——」（『真宗文化』第12・13号所収）とい

う講題で話をさせていただいております。この大学は仏教、特に親鸞聖人の教えを大切にしている大学ですので、私としても大変話しやすいという、そんな気持ちで今回もお邪魔いたしました。どうか宜しくお願いいたします。

今この会場に來まして、『縁起と浄土』という講題だったのかなと。実は私、はっきりした講題のことを忘れておりまして、この会場に來ましたら講題が掲げられているだろうと。実は、この講題につきましては、アメリカで親鸞聖人の教えを開教している開教使の方々の研修会がございまして、親鸞聖人の教えにつきましては、アメリカ、特に北米の方では西本願寺の開教使が圧倒的に多いんです。約六十人あまりいるようです。それに対しまして、東本願寺の開教使は五人しかおりません。そんな中で西本願寺の開教使さんの方々からの要請もありまして、東本願寺と西本願寺合同の公開仏教講演会を開きたいと。どうしてですかと言いましたら、これからアメリカで親鸞聖人の教えを開教していくためには、真宗の教え、親鸞聖人の教えが仏教であるということ、きちんと思想的に抑えないとアメリカ人は納得しないと。今までは、日本からアメリカへ移民した日系人の方に対する開教だったんです。ところが日系人

## 縁起と浄土

はどんどんいなくなりまして、ほとんど今は日系人であっても四世、五世ですから、日本語が分からない全くのアメリカ人。日系人の家族だと言って紹介されても、黒い人もいるし白い人もいるんですね。混じっております。親鸞聖人の教えに触れて、自分もアメリカの開教使になりたい、という日系人以外のアメリカ人もいるわけです。そういう人たちを対象とした講演をして欲しいと。講演と言いましても、講義みたいなものです。それで、どういう講題に致しますかと言いますから、私は、何でも良いですと。どんなテーマでも話すことは一緒ですから、どうかテーマは勝手につけて下さい、と言いましたら、『縁起と浄土』という講題になりました。サンフランシスコのバークレーというところに西本願寺の立派な教化センターがございまして、その講堂で話をさせて頂きました。白い方も黒い方も、かなり集まりまして、だいたい五十人くらい、これから開教使になりたいという人たちと楽しい一時を過ごしました。アメリカの場合は講義をした後、必ずいろんな質疑応答がありますから、それが非常に楽しいんですね。説明が不十分だったかなということを思い知らされながら質問に対して説明をする、そういうことがございました。そんなことを今『縁起と浄土』と

いう講題を見ながら思い起こしてしまいました。これからの話の内容と関係のないことを申しました。これから短い時間ですので、極めて大ざっぱになりますけれども、この講題の中身を皆さんにお話しさせて頂きたいと思います。

## 釈尊の出家と悟り

### ―四門出遊

ご存じのように、仏教というのは、お釈迦様、これからは「釈尊」と呼ぶことにしますけれども、釈尊によつて始まったわけです。二千五百年ほど前です。釈尊の教えが後に「仏教」として伝えられたわけです。仏教という言い方は近代になってからであろうと思いますけれども、とにかく、釈迦族の尊者の教えとして伝承されてきたわけです。その釈尊の教えはどういうことなんでしょうと、どういう中身なんでしょう。釈尊は釈迦族という小さな部族の王子として、国王の世継ぎとして生まれたわけで

## 縁起と浄土

す。その釈尊が出家をする。これも授業でお聞きとしますから思い起こしてください。どういう動機で釈尊は出家をされたんだろう。それには有名な物語があります。『四門出遊』の物語というのがあります。これから、その物語について、少し私の解釈、思いを込めながら解説していきたいと思います。

釈迦族の城、カピラ城と言うんですけれども、四つの門があつたんです。本当かどうかは知りませんが、そういうふうに物語られているんです。近年になってネパール領で、カピラ城の遺跡が見つかっています。二つの門、東の門と西の門が確認されております。半分は見つかっているのですから四つの門があつたとみていいんでしょうか。北の門と南の門はまだ見つかっていません。四つの門があるからと言って、城は四角の形をしていたとは限りませんからね。どんな形をしていたのか分かりませんが、半分は確認されており、釈尊の出家する前の名前はゴータマ・シッダータと言います。シッダータは「城の外はどうなっているんだろうか」と見学に出かけたんです。インドの城というのは、日本の城のように大名だけが住んでいるんじゃないくて、いろんな方が住んでいたようです。商人も技術者も…、農民は無理でしょう

が。いろんな仕事をする人が住んでいるわけですから結構広かったのではないかと思います。とにかく、城の外はどうなっているのかということを見るために出かけられた。そして、東の門から出て年寄りに出会った。南の門から出て病気で苦しんでいる人に出会った。そして西の門から出て死人、死骸に出会った。それで、ゴータマ・シッタールタは、ビックリ仰天して城に戻って、その度ごとに、部屋に閉じこもって物思いにふけてしまった。最後に北の門から出て沙門しゃもんに出会う。沙門というのは、宗教的真理を求めて、宗教者の説法を聞くために全国を放浪していた遍歴者のことです。その遍歴者の清らかな眼差しに感じるところがあつて、自らも沙門となって城を出て出家者となる。簡単に言うと、そういう物語なんです。沙門というのは「努力をする人」、一生懸命に努め励んでいる人という意味です。

#### ―四苦（生老病死を生きる）―

さて、この物語を聞いて、皆さんは、何か変だと思いませんか。城の外へ出て、よぼよぼ歩いている老人に出会ってビックリした。城の外へ出て、病気で苦しんでいる

# 縁起と浄土

人を見てビックリした。そして、死骸が転がっているのでビックリしたと。そうすると城の中には老人や病人や死人はいなかったんでしょか。その物語を読んでいくと、ゴータマ・シッダールタが部屋から出る時は、年寄りや病人の姿を隠したと物語られているんです。その説明で何となく「ああ、そうか」と納得するんですけど、私は納得できなかったのです。隠すというのは一体どういうことなんだろうと。年寄りや病人を部屋に閉じ込めてしまうということなのでしょうか。これはそういうことではなく、今の私たちのことではないのかと。私たちは歳を隠して生きていますね。年よりも若く見せようとしている。最近のテレビのコマーシャル見ると、そんなコマーシャルばかりでしょう。歳より若く見せたい。化粧をして、綺麗な着物を着て、体が老化していくのを隠している。これが現在の私たちですね。私は七三歳ですが、あそこにお座りになっている荒牧典俊先生も一緒の歳です。どっちが若く見えですか。私のほうが若く見えませんか。「若いですね」と言われたら嬉しくなりますよね。人間というのはそういうもんなんです。だから、城の中では、老化を隠して生きている。綺麗に化粧をし、綺麗な着物を着て、歳をとっていることを分らないよう

にして生きている。病気になったらどうでしょう。城の中には医者がいます。病気になったら治してくれる。私たちも病気になったら病院に行くでしょう。同じことです。そして、私たちは死人に出会うことは滅多にありません。病院でみんな死んでいきますから。死というものは隠されています。そういう私たちの現代と同じことが、二千五百年も前のカピラ城の中でも行われていたということなのでしょう。歳を取ることを隠し、病を治し、死ぬことを遠ざけて隠して生きている。そういう生活の中に身を置いていたシッタールタは、外へ出てもろに見たわけです。ポロポロの着物を着て杖について、化粧なんてできっこありません、そのままの姿で歳を隠すこともなく生きている人たちの姿。病気になっても医者がいません。ただひたすら自らの手で治療しながら病気が治るのを待っている。そういう病気の苦しみの中に生きている人たち。そして、死んだら道ばたにうち捨てられている人がいる。そういう現実を見た時に、釈尊は、それにビックリしたんだと思いますね。老いることを隠し、病気を治し、死ぬことを遠ざけて生きている、この私たちの生き方は、本当に正しいんだろうか。虚飾に満ちた生き方でしかないのではないか。そして、城の外で見た老・病・死



縁起と浄土

という現実こそが、どんなに隠しても遠ざけても、自分に迫ってくる命の事実である。歳を取り、病氣をして、死んでいく。そういう命の在り方のままの現実を、本当の姿を城の外で見たと、そういうことではなかったのではなからうか。年寄りや病人を隠したという物語は、単に老人や病人を部屋に閉じ込めた、隠したという、そういう表面的なことではなくて、この物語の背景に、そういう意味を見てとっていくと、何となく現在の自分の生き方に引き比べて納得できるという面があります。そこで釈尊は、生まれたからには、歳を取り、病氣をして、死んでいく「生・老・病・死」という苦しみの中に、私たちの現実がある。そして、もう一つ大事なことは、人の老いた姿を見て蔑み、病にかかった姿を見て遠ざける。年寄りを見て若さを謳歌し、病人を見て健康であることを謳歌し、そして、ひたすら死ぬことを遠ざけて、生きることだけを求めている。そういう自分の姿にドキッとしたんでしょう。言葉を換えれば、ハッと気がついたんでしょう。城の外で見た現実には、生・老・病・死を生きる自分の本当の生き様があるのではないのか。そういう思いから、釈尊は自分が老病死していくことへの切実な苦悩を感じた。それから、他の人の老病死を見て、

遠ざけて生きている、蔑んで生きている、そういう私とは、一体何者なんだろうか。そういう問いかけを持った。私はそれこそが、釈尊が出家した根本的な問題だったのではないだろうかと思います。

よくこういことが言われます。社会が良くなれば、人間は幸せになれると。社会が平和になり平等になれば、人間は幸せになれるんだと。私たちは戦後、そういう生活実感の中を生きてきました。しかし、今そうではないということが分かり始めました。世の中がどんなに平和になろうが、平等になろうが、社会がどんなに良くなっても、人間は苦悩から離れることができない存在であると。そこに釈尊の出家の問題があったと思います。社会を良くしたら、人間は幸せになれるのであれば、釈尊は出家する必要はありませんでした。城に残って王となつて、社会改革を行えばいいんです。そうではなかったんです。どんなに社会が良くなつたとしても、それに満足できずにいる私がいるという、そういう問題を解決するために、釈尊は城を出た、出家したということが言えるのではないかと、私は思います。

## 縁起と浄土

### ―苦行（私）とは何者か―

話を次に進めていきますと、城を出た釈尊は、六年間の苦行をするんです。六年間の苦行とは、何であつたのか。皆さん方はこう思つてませんか。「私がいて私が生きている」「私がいて私が死ぬ」と思つてますね。どうですか。そのように思つていますね。私が生きている。私が死ぬ。釈尊は、その「私」とは一体何者か、ということを追究したんです。私が生きていると言つて、私が死ぬんだと言つて、その「私」とは何者か、ということを経年かけて徹底的に追及した、実験したわけです。これが六年間の苦行の基本ではなかつたのかと、私は思います。

面白い比較をしますと、十七世紀に、デカルトというフランスの哲学者がいました。デカルトは、『方法序説』という著作の中で、「私とは何か」という哲学的証明として、すべてのものを疑うことができるが、疑っている自分を疑うことはできないとして、「我思う、ゆえに我あり」という、日本語訳にするとそういう言葉で、「私」は存在していると。「我思う、ゆえに我あり」という表現で、「私」というものの存在証

明としたわけですから。これが哲学的な「自我の発見」として評価されたのです。この考え方は、人間の心と体を分断することになり、後に大きな問題提起をすることになります。最も身近な事柄としては脳死を「人の死」とする「脳死による臓器移植」という問題まで引き起こしてしまいましたが、そのことは今日は触れません。

この「私」「自我」の問題について、釈尊はどうだったのか。「私が生きている」という、この「私」とは何者か。デカルトは「我思う、ゆえに我あり」という説明によって、「私」の存在証明としたわけです。しかし、デカルトは、机の上でそのように考えただけのことなんです。それに対して、釈尊は、命をかけて実験したわけです。そして、死ぬ寸前まで苦行を続けて、生きるか死ぬかの境目まで苦行をした結果、意識はもうろうとなつて、何も考えることができなくなつてしまった。その程度の「私」だったのか、ということなんです。肉体を徹底的に苦しめる苦行を続けていった結果、意識はもうろうとなつてしまつて、そこでは、「私が生きている」、「私は死ぬ」と思っているような「私」はどこかへ吹っ飛んでしまったわけです。その程度の「私」でしかなかった、ということに目覚めたんです。

## 縁起と浄土

デカルトは「我思う、ゆえに我あり」で終わっているんです。ところが、釈尊は、「我」が「我」を思えなくなる状態まで突き進んだ時に、その程度の「我」でしかなかったと、したがって「我」というものは自立した本質的な存在ではなく、肉体との関係において有り得ていることを、実験的に証明したわけです。確実な存在として、「私」というものが存在するなら、どれだけ肉体が疲労困憊しても「私」は残るはずです。かえって輝き出るはずです。それなのに、その「私」が消えてしまった。それが釈尊の六年間の苦行の中身ではなかったのではないかと、私は思うんです。そして、すぐに釈尊は覚りを開くんです。

### ―縁起（関係性）の上の存在―

六年間の苦行を通して、「確かな私はいなかった」ということを実証したわけですね。そして釈尊は覚りを開かれる。その覚りは、皆さんが授業で聞いておられると思いますが、「縁起」ということです。縁起の道理というものです。どういうことかと言いますと、この私は確かな存在としてあり得ていない。だけでも私はここにいま

す。この私は何者なのか。人間の知識では数え切れない程の、様々な因縁によって成り立っている私でしかなかった、ということに気がついたんです。「私が生きている」ではなかった。様々な因縁によって成り立っている私、様々な因縁によって「生かされている私」であつた、ということに気がついたんです。それを仏教では、目覚めた者（仏）と言うんです。普通、覚りというと、ものすごく難しいように聞こえますけれども、ようするに目覚めた、ということなんです。「ああ、そうだったのか」と気がついたんです。私たちが、眠りから目が覚めるように。目が覚めて朝の光の中に、自分を見出したように。ですから、仏陀・ブッダというのは、「目覚めた人」と言う意味なのです。「悟った人」という場合もあるけれども、私はあんまり「悟った人」という表現は、好きじゃないですね。「目覚めた人」なのです。

今年は、アメリカ大統領のオバマさんが、ノーベル平和賞をもらいましたけれども、昨年暮れに、日本でも大変なことが起こりましたね。四人の科学者がノーベル賞をもらいました。化学賞、物理学賞。すごいことですね。でもその研究についての説明を聞いて分かりましたか。私たち素人に何とか分かってもらおうとして、物理学賞

## 縁起と浄土

の益川俊英さんは、テレビでいろいろなシミュレーションを作って説明しておりましてけれども、分からないですね。難しいですね。そりゃ簡単に分かっちゃうようなことでは、ノーベル賞はもらえないかもしれないですけども。分からないですね。そのように、普通の人には分からない、特別な知識を持った、そういう意味で悟ったということじゃないんです、釈尊の場合は。誰にでも分かる目覚めを持ったということなんです。だから、仏教は世界の仏教になったんでしょう。ノーベル賞をもらうような、難しい悟りだったら、世界の仏教にはなりません。誰にでも分かる。誰もが「ああ、そうだったか」と頷くことができる、そのことに目覚めたんです。二千五百年も前ですよ。この私は何者か。私がいて私が生きているのではない。無量無数の因縁によつて生かされているだけの私であつたという、そういう命への目覚めを持ったんです。これは他の宗教にはない。ですから、仏教のことを「智慧の宗教」と言います。キリスト教は「神の宗教」「啓示の宗教」です。神の啓示を真理として信じる宗教です。それに対して、仏教は、道理をきちんと頂いていく宗教です。そういたしますと、いま私が、ここでこうして話をさせて頂くのは、私が話してるんじゃないんです

ね。七十三年間、私を私たらしめて、私というものを形成してくれた様々な因縁が、ただいまの私となっているわけでしょう。最初から私はいるわけじゃないんです。この私は、様々な因縁によって、一刻一刻変化しながら、仮初めにあり得ているわけです。地球上に生命が誕生したのは、四十億年前とか言われますけれども、私には分かりませんけれども、そうだとしますと、私の中には四十億年の命の歴史があるわけです。このことは、誰でも分かると思います。突然に生まれたわけじゃないんです。

「私はこれから生まれよう」と思って、生まれたわけでもないんです。四十億年の命の歴史を背負って、この世に今の命を賜っているわけです。それから、私たちは日頃いろんな生き物を殺して食べて身を養っていますね。釈尊は、こういうことを仰るんです。「暴力を恐れ、死を遠ざけて生きている我が身に引き比べて、殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ」（法句経）という、大変に厳しい言葉があります。暴力は嫌ですね。暴力を恐れ、できるだけ死ぬことを遠ざけて生きている。そういう自分の生き方に比べて、生き物を殺したり、殺させたりしてはならない、というんです。これを戦争反対のキャンペーンに使う人もいますけれども、それはそれとして、何も釈



## 縁起と浄土

尊は人間の命だけじゃない、全ての命を視野に入れながら、命を殺したり殺さしめて、自分の身を養っている、そういう自分への眼差しを持ちなさいということでしょう。「殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ」と言われたら、私は生きていけません、死ななければなりません。そういうことじゃないのです。そういう命を生きているという現実、多くの命の悲しみの上に、私の命は成り立っている、そのことを忘れてはいけないということなのです。私たちは現に生きています。それなら生きているのをやめましょうというわけにはいきません。やっぱり生きていたいです。できるだけ長く生きていたいです。しかし、できるだけ長く生きれば生きるほど、多くの命を奪って殺して、身を養っていく。そういう命の悲しみの積み重ねの上に、あなたの命はいま息づいているんですよ。そういう命への眼差しを失ってしまったら、人間ではないんですよということです。

とにかく、時間的には、四十億年の命の歴史がある。その流れの中で、私の命は花開いている。そして、多くの他の命を奪いながら、殺しながら、自分の命を養っている。だけど、それだけで、私が今ここに在るわけではありません。それは、生命とい

う物質的存在としての説明です。それ以外に私がここで話をさせてもらえるのは、図らずも、寺に生まれたこととか、図らずも、大谷大学で山口 益先生という素晴らしい先生に会うことができたとか、そして図らずも、親鸞聖人の教えに向き合うことができたとか。そういう形のない因縁が、今の私を作り上げているわけです。単なる生命だけじゃないんです。様々な形のない因縁が、今の私となつて、私が話をしているんです。私がいて私が話をしているのではないんです。様々な因縁が私となつて下さつて、今ここで、こういう話をさせてもらっているんです。ですから、「私が話をしている」わけではありません、因縁が私となつて、勝手にしゃべってるんです。どうしようもないですね。私の口から七十三年間、私となつてくださった有形無形の因縁が、話をしているんです。やっかいですね。社会に反することを言ったら、社会から批判されますね。仕方ないですよ。私が話してるんじゃないんです。このような私を作っている因縁が、私という仮初めの姿となつて、話をさせてもらっている。口からどんな言葉が出ていく。ノーベル化学賞もらった人は、化学の話はできるけれども、私のような話はできません。分かりますよね。簡単なことです。

## 縁起と浄土

私は、今ここで話をしています。どうしてでしょうか。そういう有形無形の因縁の上に、今の自分が成り立っているという、それだけでしょうか。皆さん方がおられるから、話をしているのです。そうですね。聞いてくださっている皆さんがいなかったら、ここで話をしている私は、成り立ちません。しかも、私には今ここで話をしている、という現実しかあり得ないんです。このこと以外に、他に私はいないんです。皆さんが、私の話を聞いて下さっているから話をしているという。皆さん方と私の関係性の上において、私のただいまの一瞬が、成り立っているんです。これが縁起ということなんです。皆さん方も、そこに座って私の話を聞いてくださっております。私に突然の事件が起こって、例えば、交通事故に遭うとか、いま流行っているインフルエンザに罹ったとか、そのためにここに私が来られなかったら、皆さん方はそこに黙って座っていますか。今とは違った皆さん方の別の在り方となっているわけです。しかし、今は私の話を聞いてくださっているということにおいて、ただいまの皆さんが成り立っているわけでしょう。私を抜きにしては、現在の皆さん方はいないんです。私の話を聞いてくださっているという皆さん方は、私が今ここで話をしているということ

がなければあり得ないわけです。これは分かりますね。

ところがこれが、結構やつかいなんです。アメリカなどでこういう話をする、なかなか分かってもらえないんです。アメリカやヨーロッパの人は、皆さん方と無関係な私がいて、それから、私と無関係な皆さんがいて、今ここで出会っていると、そういうように了解するのが、欧米の人たちです。釈尊は、そのようなことはあり得ないと言います。出会いの中で、関わり合いの中でしか、私たちは一瞬一瞬を生きていないんだと。単独で存在している私などはいないんだと。そのような単独な私は、頭の中で考えれば、考えられないわけではないけれど、現実の一瞬一瞬、生まれてから今日まで、そのように単独で存在した私などあり得ないと、これが私たちの縁起という存在なのです。このことを欧米の人たちに説明するのが難しいんです。しかし、私たちは日本に生まれて、何となく仏教の雰囲気の中におりますから、釈尊の説く縁起という道理、関係性の中において、私たちはただいまの瞬間あり得ているという、この道理は、私にはよく分かりました。そう難しくはなかったです。

## 縁起と浄土

### 煩悩

とにかく、そういうのが、釈尊の目覚めなんです。そういたしますと、私たちは、様々な因縁によつて生かされている。そして、様々な因縁によつてしか生きていない。これは身の事実です。しかし、この身の事実に出会って、そうでありましたと頭が下がったら、直ちに、そのように生きられるでしょうか。私たちは、因縁のままにしか生きていないのですから、自分の思い通りには生きられません。因縁のままに身をまかせて、風の吹くままに、身をまかせて生きれたら大満足ですね。だけど、そうはなれません。自分の思い通りにしたい、自分の思い通りに生きたい、という「私」が現にいるわけです。その「私」という束縛からどうしても抜けきれない。そこには本当に根深いものがあります。なぜならば、私たちは日頃、「私は」「私は」と言いながら生きているでしょう。そのように、「私は」となすこと、それが我執がしやうです。私たちは日常の中で、「私は」「私は」と言つて生きているわけですから、それは身に染

みついているんです。ちょっとやそつとで、その束縛からは解放されません。それから、これは「私のものだ」と言って生きているでしょう。それを我所執がしよしゅうというのです。難しい言葉でいうと、そういうことです。「私は」「私は」と言って暮らしている、これは「私のもの」「私のもの」と言って暮らしている、そういうようにして生きているわけです。そうすると、因縁のままに「生かされている私」である、という釈尊の説法を聞いて、「そうでありました」と同意しても、そうなっていない自分が見えてくるんです。

自分の思い通りに生きたいという思いから解放されないで、私たちは、自分の思い通りに生きられたら、どんなに幸せかと思つて、一生懸命になつて、思い通りに生きようとするでしょう。そして、そのために苦しんでいるのです。思い通りに生きようとするのは、欲望です。それを「貪欲とんよく」と言います。そして、思い通りにならなかったら腹立ちます。人や社会を怨みます。邪魔する周りを怨みます。それを「瞋恚しんに」と言います。そのように、都合の良い時は欲望のままに明るく生き、その都合が悪くなると腹を立てて暗く生きています。そういう愚かな生き方を、愚かであるとは気付か

## 縁起と浄土

ずに生きているのが、私たちの日常なんです。それを「愚痴ぐち」とも「無明むみょう」とも言います。これらを仏教では三毒の煩惱と言います。しかもそれだけではなく、そういう身勝手な煩惱という問題だけじゃなしに、私たちは、常に正義感を持って、善きことを行い、悪きことを行わないでおこうと。人殺しなどという悪いことしたくない。みんなそう思っ生きてますね。でもそうならないときがあるのです。因縁によって、人を殺してしまうかもしれない私がいるわけです。どんなに善いことをしようとしても、それが悪いことになってしまうこともあるわけです。いつもそうです。そういう意味でも、私たちは思い通りに生きようとして、思い通りに生きられずに、その思いがうち砕かれてしまします。善にとられ悪を恐れて生きるという、そうしなければならぬ、という道徳に束縛されて生きています。そして、善をなし得ず悪を行ってしまう自分に苦悩します。そういう私がいるわけです。しかし、因縁のままに生かされている身であつたという、釈尊の教え通りに生きられたら、このようなことは起こりません。そのまま、善も必要とせず、悪をも懼れずに、風に身をまかせる柳のように、自由自在に生きていけます。善悪の道徳に束縛されることもなく、何が起

こつても因縁のままでございましたと言って、そのすべてを引き受けていけるはずですよ。ところが、それをそうにできない私がいるんです。ここが問題なんです。

## 縁起の世界

たとえば、このような実話があります。皆さん方は、この話を聞いても、すぐには納得できないかもしれません。ダンプカーの運転手がダンプカーを運転していたら、横から女の子が飛び出してきて、ブレーキが間に合わなくて、ひき殺してしまったんです。これは、もう取り返しのない大変な事です。それで、そのダンプカーの運転手は苦しみまして、その子供の通夜にお参りしたい。だけでも、どんな目に遭うか。「人殺し」と言っておっぱらわれるかもしれない。塩をかけられるかもしれない。「どうか娘の命を返してください」と泣きつかれるかもしれない。そういうことを思うと、足がすくんで、どうしても行けない。しかし、行かないといけない。どんなひどい仕打ちを受けても、どんな辛い目にあっても、謝るしかないんだと。それで



縁起と浄土

意を決して、覚悟を決めて、その通夜にお参りに行きました。そして、その祭壇の前にひれ伏して、泣き崩れてお詫びをして、両親のいる方に向かって、涙で声にならないお詫びをしながら、どんな言葉が返ってくるのかと。その時に、とんでもないことが起こったんです。その子供の父親が、「うちの娘が突然飛び出したために、あなたに大変なご迷惑をおかけしております。すまないことです」と詫びたんです。運転手さんは、ビックリ仰天しました。皆さんはどうでしょうか、この話。「うちの娘が突然飛び出したために、あなたに大変なご迷惑をおかけしております。すまないことです」と、子供をひき殺された親が詫びたんです。これには、運転手もビックリしたんですね。この人は、一体どういう人なんだろうかと。近頃の新聞紙上をにぎわしている事件の様子を見ると、全く逆でしょう。あいつは悪いヤツだから死刑にしろと、そういう話ばかりでしょう。

それ以後、子供をひき殺した運転手と、子どもをひき殺された親との交流が始まったんです。そして、その子供の命日には、いつも揃って墓にお参りに行っているのです。そこに子供をひき殺した運転手と、子供をひき殺された親との心の通った交流が

始まって続いているのです。その親は、実は念仏者だったんです。これが縁起ということです。子供が飛び出さなかったら、ひき殺せません。ダンプカーが、他の道を通っていたら、ひき殺せません。様々な因縁の集まりの中で、そういう事件が起こるんですね。これが仏教の考え方です。善と悪を分けて、悪いヤツは消してしまえ、この世の中を善いものだけにしようと。そういうのと違うんです。因縁が変われば、お互いがお互いになっていくんです。そういう関わり合いの中で、私たちは現にいま生きているのです。もちろん、その運転手は日本人ですから、日本の刑法に従って、それだけの刑罰を受けて服役して、罪を償ったでしょう。それとは全く別の問題なのです。そういうことではないんです。命を失っていった子供に対する悲しみの涙を共にした者同士が、交流して生きあっていくという、そこに、子供は死んでしまったけれども、お互いに救われていく生き方があるのでしょうか。もし「うちの娘を殺したヤツを死刑にしろ」と叫んで、その加害者が死刑になっても、それで、ことが済むんでしょうか。子供の墓前に、そのことを報告しても、何の意味があるのでしょうか。一件落着くというようになるんでしょうか。そういうことじゃないと思います。釈尊が説く

## 縁起と浄土

縁起ということとは、このような実話で示しましたように、お互いの関係性を生きていることを、私たちに問いかけているわけです。本当に私を安らかにしてくれるのは、どうということなのかと。もちろん、子供をひき殺したという罪は死ぬまで消えません。一件落着にはなりません。死ぬまで背負っていかねばなりません。それを背負って生きていく力を頂けます。それが縁起という言葉の中に託されている内容なんです。

## 涅槃への道

釈尊の説法を聞いて、「そうでありました。この私は様々な因縁によって生かされている。ただそれだけの存在でありました」と。だから、私が生きているのではない。私が死ぬのではないのです。釈尊は、私が老いることもないし、死ぬこともないと、そういう「私が生きている」という、自我の思いから解放された世界のことを、釈尊はニルバーナ（涅槃）という言葉で表現されています。死ぬ私もないし、生き

ている私もない。不死不生です。すべて因縁のままに生きている在り方、それがニルバーナの世界であると説いています。その通りですね。

ところが、本当にその通りですと頷いても、そのように生きていない私が現にいる。そうなっていない私がいるわけです。たぶん、釈尊の弟子たちは、そのような自分自身のために修行をされたんだろうと思います。覚りを求めて、修行をしたわけではないんです。目覚めを求めて、修行をしたわけじゃないんです。釈尊の説法を聞いて目覚めたんです。目覚めたけれども、目覚めた通りには生きていない自分自身をどうしようかと。そういう問題が、仏弟子たちの修行の内容であったと思います。目覚めを求めての修行ではなくて、目覚めたが故に、目覚めた通りになっていない自分をどうしていくか。私たちも一緒なんです。釈尊の縁起という道理を頂いて、そうだったなあと、私も納得しました。だから仏教徒になりました。だけど、納得したけれども、私の日暮らしはそれに逆らって、自分の思い通りに生きたい生きたい、という欲望から離れられません。好き勝手に生きたいという面だけじゃなしに、世の中を自分の思い通りにしようとするのもそうでしょう。善いことであつても、悪いことであつ

## 縁起と浄土

でも、自分の思い通りにしたいというのが、人間の断ち切れない善悪・正邪の束縛なんです。親鸞聖人は、私たちは死ぬまで、その欲望の束縛から離れることはできないと。そんな自分は、どうしたらいいんだろうかという問題です。皆さん方はどうですか。死にたくないですね。最近は死にたいと言って、死ぬ人がいるそうですが、ごく稀な人です。大半の人は死にたくないと思っています。私も死にたくないです。生きていたいし、死ぬのは嫌です。これは、自分の思い通りに生きたいということでしょう。自分の思い通りに生きたいという、一番の根本的な問題は「死にたくない」ということです。たぶん私も、死ぬ時には、死にたくないと思って死ぬでしょう。あるいは、「死にたくない」と絶句して死ぬかもしれませんね。どうなるか分からないけれども、死にたくない。それが思い通りに生きたいということです。死ぬ最後の瞬間まで、自分の思い通りに生きたい、という思いから解放されることがないこの私。釈尊の目覚めによって明らかにになった覺りを、自分の上に実現することができずに命を終えていくんだという、この問題ですね。この問題を明らかにしたのが、大乘仏教の根本だろうと思います。

## 菩薩の誓願

大乘仏教にも、いろんな經典がありますけれども、大乘仏教の教えの多くは、菩薩精神、菩薩の誓願を基本としています。「私はいつでも仏に成ることができるけれども、仏に成りたいと願う全ての人々が、仏に成ならない限りは、私は仏に成ならない」という誓いです。これが菩薩の誓願です。私はいつでも、釈尊と同じ仏と成って生ききえることはできるけれども、仏と成りたいと願う全ての人々が、そうならない限りは、自らも仏に成らないという、誓いを立てたのが菩薩です。これが大乘仏教の一つの大きな柱です。釈尊の覚りによる智慧が、全ての人々を仏に成らしめたいという慈悲となって、すなわち、菩薩の誓願となって、華開いたのです。

菩薩はどうして、そのような誓願を立てることができたのでしょうか。菩薩の誓願は立派だけれども、誇大妄想でしかないのではないか。単なる理想でしかないのではないか。私は若い時に、そのような疑問を持ちました。しかしそうではなかったんで

## 縁起と浄土

す。菩薩は確信を持って、確かな根拠に基づいて、そのように誓願したんです。それはどういうことでしょうか。私たちは、様々な因縁によって成り立って、生かされているという、その事實は、どうでしょうか。釈尊においても、この私においても、一緒ではないでしょうか。ただ、その通りに生きられないでいる私がいるだけであって、様々な因縁によって成り立っている私であるということは、そのことに目覚めて、そのように生ききった釈尊も、そのことに目覚めても、そのようには生きられないでいる私も、一緒なのですね。皆さん方だって、様々な因縁によって、ただいま皆さんとしてそこにおられるんです。そのように一緒なのです。釈尊と同じ地平に、私たちも立っている、それを縁起的存在と言っていていいでしょう。縁起によって成り立っている私たちの存在。その縁起的存在であることにおいては、私も釈尊と一緒にです。そのことに目覚めて、生ききっている覚りの人と、目覚めながらそのままに、生ききれないでいる迷いの私との違いがあるだけです。そのことに立脚して、菩薩は誓願を立てたんです。必ずそうなりますという、どんなに迷っていても、死ぬ瞬間まで「死にたくない」と言って、自分の思い通りに生きようとするこの私であっても、

必ず釈尊と同じ涅槃の境地に至ることができずと。そのことへの確かな知見があったからこそ、菩薩たちは、一切の人々が、釈尊の説法を聞いて、目覚めたものと成って生きたいと願う人であるならば、たとえそうなりきれないでいても、一人残らず、必ず釈尊と同じ目覚めの世界に至らしめます、という菩薩の誓願が、もつとも具体的な内容をもつて説かれているのが『浄土経典』です。そこにおいては、仏に成りたいと願って生きる者は、「必ずそのようにならしめる」という菩薩の誓願が、阿弥陀如来の極楽浄土において成就すると説かれています。すこし難しいかもしれませんが、私たちが、仏に成りたいと願うならば、それだけで、努力することなく、必然的にそうなれるということです。「必ずそうなる」という必然性が説かれているわけです。親鸞聖人は、その浄土思想に遭遇って、「このような私であつても、仏に成りたいと願って生きていていいんだ」と。そういう喜びを持たれた。自分の思い通りに生きようとして生きている。こんな私は、仏と成るということとは無縁の存在である、と思つていたけれども、そうではなかったという、親鸞聖人の歎喜があるんです。

このことについて、たとえば、親鸞聖人は、『唯信鈔文意』<sup>ゆいしんしょうもんい</sup>という書物の中で、



縁起と浄土

石、瓦、礫（かわら づぶて）のような、煩惱具足の凡夫である私たちが金（こがね）のような、釈尊と同じ大なる涅槃の覺りに至ることができる。石、瓦、礫が金になるわけはありませんね。それなのに、金にならしめるとというのが菩薩の誓願なんです。このように頂いたわけです。死ぬ瞬間まで、自分の思い通りに生きたい生きたいと迷っているこの私は、仏教の専門語でいうと、煩惱具足の凡夫です。すこし難しい言葉ですか。このような煩惱から離れられないで生きている、善惡の束縛の中で生きているのが、凡夫という生き方です。煩惱具足の凡夫が、大いなる涅槃の覺りに至ることができる。あたかも、石、瓦、礫が金になるようなものだ。そのようなことは、この世間ではありえないのに、何と不思議なことであろうか。親鸞聖人において「不思議」というのはこういうことなんです。煩惱具足の凡夫が仏に成るということは、何と不思議なことかと。これは人間の善惡を物差しとしていてる分別では、間に合いません。あり得ないことですからね。そのあり得ないことが起こる。そこに、釈尊の覺りの智慧に基づいた菩薩の誓願に出遇った、親鸞聖人の感動があるわけです。しかもそのことが、阿弥陀如来の本願としてすでに成就されていることを説いているのが、浄土経典なのです。「必ず

そのようになる」という、必然性の成就が、本願として説かれているわけです。そのような本願は、何によつて成り立っているのかというと、釈尊も私も、仏も凡夫も、区別なく、縁起的存在であるという事実に立っているからです。それを仏教の専門用語で言うと、真如平等とか、一如平等と言います。すべて同じ地平に立っているのです。それを仏凡一体とも言います。仏と同じ地平に立ちながら、私たちは、迷いから離れることができない凡夫のままにいる。しかし、同じ地平に立っているということにおいては、同じなんです。

### 涅槃の完成

ところで、釈尊自身も、自らの目覚めの通りに、八十年間、八十歳の生涯を終えられたのでしょうか。私はそうは思わないんです。そのことについての教理的な説明は、差し控えますけれども、釈尊であっても、人間として生きたわけです。自分の目覚めた通りに、人生を全うされたわけではないのではないかと思います。やはりいろ

## 縁起と浄土

いろいろな思いを持つて、時には弟子たちに忠告をしたり悩んだり、そのようないろいろな分別を持つて生きられたのではないかと思います。縁起の道理のままに生きるということは、生きていたい、死にたくない、という人間の分別を超えた世界です。私たちの世界を生まれ死ぬと書きます。「生死の世界」です。その生死という生まれ変わり死に変わりを、繰り返している世界のことを「輪廻」と言います。その輪廻を内容から言いますと「生死」です。生まれ死ぬということは、私たちがこの世に生まれて死んでいくという、生命的な問題提起だけではないと思います。中身は、生きていたい、死にたくないという分別の世界が繰り返されていく、それが輪廻の本質だと思います。そういう、生きていたい死にたくない、という分別の中で生きている世界から解放されていく、それが涅槃の世界です。釈尊自身も、そのような涅槃は亡くなる時に完結されたわけです。ですから、釈尊が八十歳で入滅される、そのときの様子を説いている經典は『大般涅槃經』（だいはつねはんぎょう）と言います。大いなる完全な涅槃を説いている經典という経題です。釈尊が入滅されるときのことを記録している經典です。完全な涅槃、これを親鸞聖人は「無上涅槃」とも言います。この上ない涅槃。あるいは、「大

涅槃」。大いなる涅槃とも言います。親鸞聖人が無上涅槃・大涅槃と言われるのは、大般涅槃のことです。釈尊自身も、八十歳で入滅されて行く時に、生きていたい死にたくない、という分別の世界を超えた身となっていく。そのことを、自ら私たちに示して下さっていると、浄土經典の『ぶつせつむりようじゅききょう 仏説無量壽經』には説かれています。これは漢訳のみに説かれています。この部分は、サンスクリット原本にはありませんけれども、釈尊の生涯を物語的に、美しく簡略に説いているところがあります。その最後のところでの、菩薩たちに対する説法なんですが、そのところに説かれている「成正覚 示現滅度」という漢文です。内容を分かりやすく解説しますと、釈尊は、三十五歳で覺りを開かれますが、その覺りのことを等正覚と言います。その等正覚を成し遂げられて、八十歳の入滅の時に、滅度というのは完全な涅槃という意味ですが、それを身をもってお示し下さったと、ここに説かれているわけです。成等正覚・目覺めを成し遂げられた。これが三十五歳の時です。そして、滅度・完全な涅槃を身をもつて示して下さった、示現された。それが八十歳で入滅される時です。だから、私たちは死ぬ最後の瞬間まで、死にたくない生きていたいと、生死に束縛されて生きてい

## 縁起と浄土

る、このような私であっても、仏に成りたいと願って生きるとき、釈尊が身をもって示して下さったように、必ず臨終の一念において、釈尊と同じ完全な涅槃を身に実現していくことができるのであると。

そこに浄土に往生するという了解があるんです。浄土というのは、死んでからの未来の生死の世界ではないのです。そこにおいて、釈尊と同じ般涅槃、大いなる完全な涅槃が実現される、その瞬間と言いましょか、それが浄土として願われているわけです。そこに、親鸞聖人は自分のようなものが仏に成っていくためのただ一つの道、それ以外の道はない、ただ一つの道を確信されたわけです。たとえば、禅宗のように出家されて修行をしてこの世において仏に成ることを求める道があってもいいのです。しかし、親鸞聖人は、それは自分にはできない。そんな私にとって、ただ一つ残されたのは、阿弥陀如来の本願を信じて、釈尊が身をもって示して下さった完全な涅槃という事実に向かって、私もそのように願われて生きるものとなる。それが親鸞聖人の教えなんです。

## 信心の智慧

今日の話は、難しかったでしょうか。最後に、大学での話にはふさわしくないかもしれませんが、私も長い間、いろいろな方と接して来ますから、実際に出会った方の話を一つさせていただきます。これは広島の方で、広島と言いますと、西本願寺の基盤、安芸門徒とも言われている土地柄です。その安芸門徒と言われている広島で、西本願寺の研修会ありました。もちろん、住職だけではなく門徒の方、真宗では念仏を頂いている方を門徒と言います。これは親鸞聖人の言葉に基づいています。その門徒の方も、たくさん来ておられました。私が午前と午後に話をさせていただきました。その後、質疑応答ということになりました。その時に、一番前の椅子に座っておられた年輩の女性の方が、お立ちになりました、「一つ質問をさせて頂きたい」と。「私は九十歳になります。この歳までお念仏の教え、親鸞聖人の教えを聴聞させて頂いております。それなのに、夜中に、おトイレに行って帰ってきて、真つ暗

縁起と浄土

な部屋の中で布団に入った時、時々、私は死ぬんだなあと、そう思うと恐ろしくて、朝まで眠れない時があります」と。九十まで念仏の教えを聞いてきたおばあちゃんが、この歳まで念仏を聞いてきたのに、夜の真つ暗な部屋の中で、私は死ぬんだなあということをおもったら、恐ろしくて眠れない夜があります。こんな私は、どうしたらいいんでしょう、そういう質問だったんです。この時、私がすぐに思い出したのは『歎異抄』の第九章です。親鸞聖人は、そこで「いささか所労のこともあれば、死なざるやらんところはおほゆることも、煩惱の所為なり」と。親鸞聖人自身が、「いささか所労」というのは、体が疲れたということです。こっちの言葉で言うところ「しんどいなあ」ということでしょう。「死なざるやらん」、死ぬのではないかと。「こころはおほゆることも煩惱の所為なり」、それは煩惱の仕業ですと。だから、おあばちゃんだけじゃないんです。親鸞聖人も同じなんです。私も同じなんです。どんなに念仏を頂いても、死にたくないんです。死は恐ろしいのです。それは煩惱の仕業なんです。どうにもならんです。しかし、必ず命を終えて行かなければなりません。どんなに名残惜しく思っても、命を終えて行かなければなりません。その

時は、浄土に往生させて頂くということは、ちゃんと頂いておりますかと尋ねましたら、おばあちゃんは、最初は緊張してたんでしょね、立って真つ青な顔をして手をブルブル震わせながら自分の思いを吐露されておられたおばあちゃんが、その時に、「それだけは頂いております」と言われました。それで、私は「おばあちゃん、それ以上の満足はないじゃないですか。それは最高の満足ですよ。それ以上の喜びは人間にはないですよ」と言いましたら、ニコツと笑って、真つ白な顔に少し赤みがさして、緊張がほぐれたんでしょう。「ありがとうございます」と言って、お座りになりました。

私たちは、死ぬのは嫌です。死を恐れて生きます。それは煩惱です。しかし、命を終えたら浄土に往生させて頂き、釈尊と同じように、無上涅槃の覚りを頂く、そういう浄土に往生するということは頂いております、と言って、自信を持っておっしゃいました。これが、念仏による智慧なんです。死を恐れるのは煩惱です。しかし、死後を恐れるのは無知です。命を終えれば、浄土に往生させて頂きますといつて、ニコツと笑って座れることは智慧なんです。ここのことですね。私たちは、死を恐れるこ



# 縁起と浄土

とと、死後を恐れることを、一緒にしてしまっているのではないのでしょうか。私たちは、死ぬ瞬間まで死を恐れて生きます。それは煩惱ですから、煩惱に任せておくしかないのです。煩惱のままにしか生きられないのですから。しかし、命を終える時、釈尊が身をもつて示して下さった無上涅槃に至らしめられると、そういう信心、信ずる心を本願から頂く。これが親鸞聖人の教えです。親鸞聖人は、そのことを「信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり」と仰っています。本願を信じて、念仏して仏になるということは、私の分別を超えている、阿弥陀如来の本願の必然性としての、ありのままのあり方であると。死にたくない、生きていたいという、人間の分別を超えたあり方であると。それを自然と言います。それは「自ずから然らしむ」という意味です。そして、「自然はすなわち報土なり」と、報土とは、そのように、釈尊の覚りの智慧が実現されるように報われていく浄土のことです。そして、「証大涅槃うたがわず」と。そこにおいて、最高の覚り、完全な涅槃が実現される、大涅槃の覚りを開く、無上涅槃の覚りを開くということです。信ずる心は本願によって頂いたものです。そうでありましたと、こんな私でもそうなれるんです、仏に成れるのです、とい

う本願に促されて、信ずる心が生じます。「信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり 自然はすなわち報土なり 証大涅槃うたがわず」と、こういう和讃があります。

## 終わりに

以上が、今日の講題を見ながら、いま思いつくまま話をしたところです。これまでの話によって明らかのように、釈尊の覚りは、「生かされている命であることへの目覚め」と言うことです。私たちが、その目覚めを持つことができたならば、私たちは仏教徒なのです。しかし、「私は生きているんだ。生かされているわけではない」という人は、仏教徒ではありません。釈尊の説法を聞いても、納得できないで立ち去った人もいたのです。やっぱり私がいるんだ、私がいて、何とかしなければならぬ、私がいて、責任をもたなければならぬと、「私」という存在に力を込めて生きようとする人は、釈尊の説法を聞いても納得できません。インドであれば、この世において、私が善いことをいっぱいして、次の生まれには、もっともっと幸せな世界に生ま

## 縁起と浄土

れ変りたいと。その時に「私」がいなかったならば、それはできないと、そういつて、輪廻に執着する人は、釈尊の説法には納得できません。そのように、釈尊の説法を聞いても、納得しなかった人もいたのです。

仏教徒は、釈尊のように仏に成りたいと願って生きる。そして、仏に成りたいと願った者は全て一人残さず、必ず仏に成れるという仏道を明らかにしたのが、浄土思想です。そのことを、身をもって具体的に私たちにお示し下さったのが、釈尊であり、それを信じて、仏に成りたいと念仏道を生ききったのが、親鸞聖人です。

時間が来ましたので、これで終わらせて頂きます。

——二〇〇九年一〇月三〇日——